

『飯田語録』に見る、変革の中で失ってはならないこと

一般財団法人アーネスト育成財団
理事長 西河洋一

新型コロナ感染やデジタルトランスフォーメーションで、日本の企業は変革の嵐の中にいる。変革の中にあっても、失ってはならないことがある。前回の引き続いで、飯田GHD創業時の飯田一男会長が残した座右の銘にしている『飯田語録』から、その一部を紹介したい。『飯田語録』とは、飯田会長の下で働きながら日々言われたことを語録としてまとめたものである。飯田会長は、幾多の荒波を、知恵を出し苦労して乗り切ってきた。

「語録4：身の丈に合った仕事をしろ

経験を積んでいくと、今までできなかったような情報も入ってくるようになる。その内に実力以上の案件が入り出し、それに手を付けてしまう。実力以上の多額の借入れをすれば、危機の時に乗り切ることができない。金融機関に見放され倒産するしかなくなる。自分自身の身の丈にどれ位あるという認識も、常に考え頭の中に入れて行動する。身の丈以上の仕事のチャレンジは一つだけで複数は絶対にやってはいけない。やる時は考えに考え抜いて、慎重かつ丁寧に進めるように」。

順調に成長を続けていくとき、自分の実力が見えなくなることがある。その身の丈を知ること、それ自体が難しいことである。その葛藤の中での身の丈以上のチャレンジ、一つだけなら良いという。問題が起きて一つなら、そこに経営資源を集中して、全力で対策することができるとの示唆を受けた。

「語録5：道理をわきまえろ

ものごとには道理がある。普通の人がもっともだと考えるようなことは大抵正解である。欲で道理を外れるようなことは行ってはならない。お金の儲け話の裏側で、道理を無視したような事があるが、そういうことを絶対にしてはならない。業界の中にも、悪しき慣習等があるが、そういう事を正しくしていくのは我々の責務である。

道理に合った、正しいルールの中で、公平な競争するように。同業者が、道理を外れた商売をして利益を上げているとしても、決して真似をしてはならない」。

業界には、悪しき慣習があり、その慣習に従うよう求めてくる。効率が悪くても、断固拒否をして正しき道を手繰り寄せる。時間がかかっても、正道を歩み解決をしてきた。海外との取引では良く賄賂を要求される。断固拒否をして、効率が悪くても正しき道を見つけてビジネスをしてきた。

「語録6：金銭感覚をしっかりと持て

我々の商売は、扱う金額が大きいので、金銭感覚が麻痺してしまう。我々は一つ売れば数百万の利益がでるが、農家は一つ売って数十円、部品メーカーは一つ売って何銭という感覚の違いがある。貧乏であった時の自分の金銭感覚は、絶対に忘れないようにしろ。実際に家を買う人の金銭感覚で考えるようにしろ。彼らは30年ものローンをこれから抱えていくのだから」。

顧客の気持ちになれないと、顧客の求める家づくりはできないと思う。家づくりは、目に見えないほどの沢山の人の小さな価値の集積でつくり上げられていることを忘れてはならない。

—以上—